みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第772号（通巻1276号）

東京YMCA

3
2020年

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
Tel 03-6302-1960
URL http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

2

3

1

1．「にほんご学院」の留学生たち
2．スキー研修中のボランティアリーダー
3．江東幼稚園の園児たちもピンクシャツのお話を聞いて考えました。
4．藍染めならぬ「ピンク染め」のＴシャツを作った高等学院生
5．東陽町コミュニティーセンターでは『子ども六法』を展示
6．「ストップいじめ！ナビ」の弁護士・足立悠さん（写真右）と高等学院長の井口真さん

6

5

4

ＹＭＣＡ　ピンクシャツデー2020

ピンクのシャツで　いじめに反対

いじめのない社会を目指して今年も全国のＹＭＣＡは、２月の最終水曜日に「ピンクシャツデー」を実施。園児や学生、教職員がピンク色の服や小物を身につけ、いじめ反対をアピールしました。数年前から始まったこの運動は、ＹＭＣＡ内ではすっかり恒例行事として定着してきたほか、今年は横浜ＹＭＣＡの取り組みが全国紙に掲載されるなど各地でメディアにも取り上げられ、徐々に社会にも拡がりをみせ始めています。

東京ＹＭＣＡの各部でもそれぞれに工夫をこらした取り組みがなされました。「芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ」では、訪れた子どもたちや乳幼児親子連れがピンク色のマスクを制作していじめについて考える時間をもちました。また東陽町コミュニティーセンターでは、昨年発行された話題作『子ども六法』（山崎総一郎著、弘文堂）を館内に展示して「大人にはいじめから子どもを救う義務がある」「いじめから逃れることをあきらめないで」などのメッセージを伝えたほか、いじめに関する子どもたちの寄せ書きを壁いっぱいに掲示しました。

また高等学院では今年も「ストップいじめ！ナビ」の弁護士・足立悠さんを講師に招いて「いじめ予防授業」を行ない、法律では「一切の理由に関係なく、やられた人が苦痛を感じていればいじめ」と定義されていること、いじめは人権侵害であること、どんな状況でもいじめてはいけないことなどを学びました。また足立さんはいじめが起きた場合の対処法について、加害者と被害者だけでは解決できない上、仲裁に入れば新たないじめのターゲットになるなどリスクもあるため、「ピンクシャツを着たカナダの少年たちのように、周囲の人たちが連帯していじめ反対の雰囲気を作り、被害者を孤立させないことが、いじめをストップする有効な手立てになる」と説明しました。

社会のいたるところでいじめが起きている昨今ですが、全国のＹＭＣＡでは「傍観者にならないこと」を標語とし、今後もこの取り組みに力を入れていきます。

「ピンクシャツデー」
2007年カナダで始まったいじめ反対運動。ピンクシャツで登校した少年がゲイだといじめられたのを見た友人たちが、数十枚のピンクシャツを購入。皆で着た結果いじめが自然になくなったという。このエピソードが世界約７０カ国に拡まり、２月第４水曜日は「ピンクシャツデー」と呼ばれるようになりました。

新型コロナウイルス感染防止に伴うイベントなどの中止・変更について

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、東京ＹＭＣＡは春休みのキャンプやスクールを中止したほか、３月の水泳クラスや体験授業など、一部事業の中止または変更の措置をとっております。今後の開催状況については、ホームページ等でお知らせします。事前にご確認の上、お出かけください。

東京ＹＭＣＡホームページ
http://tokyo.ymca.or.jp/

赤▽三角

先日、会員協議会「ソシアス」の席上で私は初めて、今年がＹＭＣＡのキャンプ１００年の記念の年だと知った。同席の方々には周知の情報だったようだが、自己紹介で「子どもの頃からキャンプに参加し、学生時代は野尻・山中湖で駐在リーダーをしました」と言った後だった私は、なんとも落ち着かない気持ちにさせられた▼数年前から会員部運営委員としてお手伝いする中で、キャンプ１００年に限らず、ＹＭＣＡの活動の多様さを知り驚いている。まさに金太郎飴の反対で、関わり方次第で違ったＹＭＣＡの顔がいくつも見える▼会員部では今、これまでの活動参加者に、会員として継続的に支持いただくにはどうしたらいいかを話し合っている。キャンプリーダーＯＢの発想で『オール東京ＯＧＯＢキャンプを開き、帰り掛けに会員申込書を配ればすぐに30人位は集まるさ』と浅知恵を思いついたが、そんなに単純な話では無いだろう▼多様な関わり方をしていた方々に賛同いただくには、ＹＭＣＡが身近にイメージできるよう、具体的な表現や発信方法などの工夫と不断のコミュニケーションが欠かせない、と改めて思う。（会員部運営委員／東京武蔵野多摩ワイズ／小林文彦）

会員協議会「ソシアス２０１９」

「これからの会員のあり方」に提言

年に一度、ＹＭＣＡの課題や方針などについて会員と職員が自由に話し合う「会員協議会『ソシアス』」が2月11日、山手センターを会場に開催され40人が参加しました。今年のテーマは「これからの会員のあり方～お互いを知ろう」。会員数が低迷するここ数年の状況を受けて綿引康司会員部運営委員長は冒頭で「会員活動を活性化するためには、会員制度も含めて会員のあり方を問い直すべき時期にきているのではないか」と述べ、「思い切った意見・提案を募り、次年度計画に反映していきたい」と呼びかけました。

まずは東京ＹＭＣＡの現状をよく知る必要があると、第一部ではコミュニティーセンターや語学事業部など5つの事業部統括から活動報告がされ、第二部で分団協議を行なって忌憚のない意見交換がなされました。最後に、分団で出された意見を「ＹＭＣＡへの提言」として分団ごとに発表し、綿引委員長から菅谷淳総主事へと提出されました（左枠）。

なお、お預かりした提言はその後、管理職会議で検討され、４月からの２０２０年度計画に盛り込まれる見通しとなりました。今後、評議員会等の承認を経て決定され、次号で詳細お知らせの予定です。（広報室）

↑綿引委員長（写真右）から、菅谷総主事（写真左）に会員の「提言」が渡されました。

↑分団で話し合う会員たち

会場からの主な意見

＜会費・会員制度等に関する意見＞

●ボランティアリーダーなど、会員登録はしていなくてもＹＭＣＡに貢献している人たちがいる。会費を払うだけが会員ではないのではないか？
●学生ボランティアは卒業後、会員に登録することもなくＹＭＣＡと離れてしまう。ＯＢＯＧとのつながりを大事にできないか。
●仕事や子育てで忙しい時期やお金のない時期にもＹＭＣＡとの関わりを継続できるようにしたい。

【プログラムに関する意見】

●日常的にボランティアできる場がもっと欲しい。
●高齢者向けのプログラム、社会人が活躍できるボランティア活動など、もっと魅力的なプログラムがあれば、会員も増えるのではないか。

【会員増強・広報に関する意見】

●「明日のリーダーを育てるために」など、会員募集のキャッチフレーズを作る。
●ＹＭＣＡの主張をもっと社会にアピールする
●楽しければ人は集まる。口コミでＹＭＣＡの楽しさや良さを広める。

9年目の福島で

ＹＭＣＡスタッフ研修会

1月29日～30日に第15回「東日本地区ＹＭＣＡスタッフ研修会」が福島県南相馬市で開催され、9ＹＭＣＡから29人の職員が参加。東京ＹＭＣＡからも4人が参加しました。

当日は季節外れの豪雨に見舞われ、予定していたフィールドワークは大幅に時間短縮せざるを得ませんでしたが、それでも原発事故の爪痕が残る「希望の牧場」や廃炉資料館を見学し、被災した方々のお話しを伺うことができました。

昨年に続き講師をお願いしたマイノリティー宣教センターの金迅野牧師からは、ＹＭＣＡスタッフとしてのキリスト教理解および平和についてお話しいただきました。特に福島の惨状を前に「隣人を愛するとはどういうことか」について改めて学び、ＹＭＣＡ職員としての在り方を見つめ直すひとときを持ちました。

参加した職員の感想を下欄に紹介します。

（会員部　中里　敦）

支援の必要を実感

会員部　職員　遠藤　仁子

もうすぐ震災から9年が経ちますが、福島ではまだ自宅に戻れない区域もあり、帰宅できる区域でも今も家族が離れて暮らすなどしています。自分の家や故郷を離れることで、体調を崩したり、いじめや差別にあうこともあるという話を伺いました。震災により多くの人々の暮らしや人生が変わってしまい、家や建物は再建できても、過ぎてしまった時間はもう取り戻せないのだと感じました。

また、福島の方にお話を伺い、様々な場所を見る中で、子を持つ親として、福島で子育てをしていくことの不安や難しさを考えました。東京ＹＭＣＡでは、三菱商事株式会社の協賛を得て、東日本大震災で被災した子どもとその家族を対象としたリフレッシュキャンプを行っています。今回の研修を経て、改めてこのキャンプを行う意味や、まだまだこのような支援が必要とされていることを実感しました。また、支援のために寄せられる一つひとつの募金の大切さも改めて感じています。

近年、毎年のように自然災害が発生しているので、どうしても起きたばかりの災害に気を取られます。災害の規模や時期によらず、支援を必要としている地域や人々に寄り添える自分でありたいと感じました。

愛恵エッセイ賞

～豊かな福祉社会を創るために～

「東京ＹＭＣＡ高等学院生が優秀賞

「豊かな福祉社会を創るために」をテーマに全国からエッセイを募る「愛恵エッセイ賞」を、今年も東京ＹＭＣＡは公益財団法人愛恵福祉支援財団と共催で行い、学生、一般、専門職など計242人の方に応募いただきました。

今年のサブテーマは「わたしらしく、あなたらしく」。最優秀賞には「子どもらしく生きることが保障がされていない社会」を書いた児童相談所職員の作品が選ばれたほか、ボランティア体験を通じて自分らしく生きようとする一般の方のエッセイなど、多彩な作品が寄せられました。

東京ＹＭＣＡからは、高等学院生の志田明さんの作品『一人ひとりの違い』が優秀賞を受賞しました。幼少時に自閉症と診断された志田さんは、小中学校でクラスに溶け込めずにいじめられることもあり、「時には死にたいと思った」と自身を振り返った上で、「みんなの違い、個性を尊重して、みんなが幸せになれるような社会のことを『福祉社会』というのではないでしょうか」と、その切実な思いを投稿しました。

３月に予定していた表彰式は、新型コロナウイルス感染防止のため開催できませんでしたが、受賞作品は例年どおり冊子にまとめられ、関係機関などへ配布されます。ご覧になりたい方は会員部へご連絡ください。　（tel.03-6278-9071）

総主事カフェ

東京ＹＭＣＡ総主事　菅谷　淳

総主事カフェにようこそ。

次男がこの春大学を卒業し引っ越すというので、大阪の彼のアパートを訪ねました。薬学を学んだ彼の本棚には難しい本がびっしり、と思いきやたくさんの漫画本が並んでいました。本棚に見覚えのある赤い大きな本がありました。手に取ると「日本・世界のおはなし１０１話～チャイルド本社」と書いてありました。そうそう、子どもたちが小さい頃、寝床で読んで聞かせた昔話やおとぎ話の本です。家族で引っ越す時にゴミに出したのを、もったいないと彼が持ってきたのでした。

中をパラパラめくっているとふと目に留まったお話がありました。「幸福な王子」というおとぎ話です。ご存知の方も多いと思いますが、ある町の広場に立っていた「幸福な王子」という名前の銅像が、群れから離れたツバメに頼み、自分の剣に使われていたルビーや、目のサファイヤ、体の金箔などを次々とはがして、町の貧しい人たちに届けさせたというお話しです。やがて、一切の飾りを失った王子の銅像を見た町の人たちは、「なんて汚い像だ」と言って溶かされ、足元で死んでいたツバメと一緒に捨てられてしまいます。しかし、この様子を見ていた天使は、ゴミ捨て場から溶けた銅の塊とツバメの亡骸を「この町で一番尊いもの」として、神様のいる天に持って行ったというのです。

私はその昔、これを読みながら涙が止まらなくなり、それを見た子どもたちも泣き始めて、子どもたちを寝かせるどころか我が家がパニックになって、妻に叱られたのを思い出しました。当時は王子とツバメがただただ可哀そうで涙が溢れたのですが、今読み返してみるとなぜ王子に「幸福な」とついているのか分かったような気がします。毎日町の悲しい様子を眺めることしかできなかった王子が、ツバメのおかげでやっと人々の役に立てたこと、例えボロボロになって最後は溶かされても、町の人々の幸福こそが自分の幸福であると王子は考えていたのではないでしょうか。亡くなったツバメも王子と町の人々の役に立てたことは幸せだったことでしょう。可哀そうとしか思えなかった王子とツバメを、実は望みが叶って幸福だったと思えるようになったのは、ＹＭＣＡで聖書を読み、祈り、感謝する時間をたくさん過ごしてきたからかなとちょっぴり嬉しくなりました。

一度は捨てられたこの本をゴミ捨て場から次男が拾ってきて、20年以上の時を経てもう一度読んで感動したなんて、神様の粋な計らいだったのかもと思いました。

学びの時～　名講師 続々と

■「反抗期、思春期のトリセツ」子育て講演会

高野優さん（育児マンガ家）

2月1日、「第14回子育て講演会」をしののめＹＭＣＡこども園を会場に開催しました。講師には育児マンガ家の高野優さんをお迎えし「反抗期、思春期のトリセツ」と題して、お話いただきました。高野さんは現在、社会人、高校生の3姉妹の母親であり第8回にも講演いただきましたが、6年ぶりのお話は、お子様方の成長ぶりが垣間見えるような楽しい内容でした。マンガを描きながらのユニークな講演で、「反抗期も思春期も、子どもが成長する大切な通過点であり、子どもを見守り、暴言に闘わず、楽に考え、育てる」ためのコツを、まさに“口八丁手八丁”に話され、参加者を魅了しました。終わりにマンガの手を休めてご自身の生い立ちを振り返り、身近な人に認められて、褒められたこと、周囲の人の助けに気づいたことを情緒豊かに話されたのが印象に残りました。会場は温かな素敵な雰囲気につつまれて、サイン会も長蛇の列でした。この講演会はＹＭＣＡ会員部と、会員・職員有志の協力で企画をしていますが、多数の企業からもご支援いただきました。参加者は119名でした。

（子育て講演会実行委員／東京ワイズメンズクラブ　佐藤茂美）

■「サッカーにおけるスポーツマンシップ」新春午餐会

金田喜稔さん（元サッカー日本代表）

元サッカー日本代表選手の金田喜稔さんをお迎えして1月23日、「新春午餐会」を開催。会場の学士会館には東京YMCA会員など33人が集いました。金田さんは現在、日本のサッカー界において輝かしい功績を収めたプレーヤーたちによる「日本サッカー名蹴会」の会長を務められており、日本サッカーの普及・発展を目指すとともに、青少年をはじめあらゆる世代の心身の健全育成に携わるなど、社会貢献活動にも力を入れています。

この日は「サッカーにおけるスポーツマンシップ」と題し、サッカーを始めたきっかけや、19歳で日本代表最年少得点記録を出したことをはじめ、その後の国内外での講演活動など、これまでの豊富な体験や出会いについて語られました。

会の途中でサプライズとして、日本代表選手の練習着数点を会場の皆さんとジャンケンゲームをしながらプレゼント。楽しい時間となりました。金田さんの講演は、まさに現役時代の「名ドリブル」と同様にキレがよく、その語り口調と演出力の高さに皆酔いしれた午餐会となりました。（賛助会事務局　佐藤信也）

■「100人いれば100通りの性」高等学院講演会

平良愛香さん（日本基督教団川和教会牧師）

東京YMCA高等学院では1月18日、日本で初めてゲイであることをカミングアウトして牧師になった平良愛香さんをお招きして、性の豊かさと差別の苦しさを知る講演会を行いました。セクシャルマイノリティーと言われる人たちが、自分のことを認められない、社会の中で位置づけられない状態を経て生き延びていく苦しさや、それと気づかずに傷つけてしまう周囲の人たちの実情を、ご自身の体験をもとにお話いただきました。

平良さんは、差別を無くすのに必要なのは、正しい知識を身につけることと、豊かな想像力の二つだとおっしゃいました。この二つは性の問題に限らず、人を大切にしていくために必要なことであり、またこの問題はあらゆる人権問題の基本となると感じた講演会でした。（高等学院　井口真）

■「生きづらい社会を生き抜くために」

林恭子さん（ひきこもりＵＸ会議代表理事）

オープンスペースlibyでは2月1日、引きこもり当事者の林恭子さんをお招きして講演会を行いました。林さんのお話しの中で、引きこもっていると「お天気もいいんだから、ちょっとは外に出てみたら？」と言われるけれど、とても他の人と同じ場所に暮らしているとは思えない心境なのだそうで、そのことを「他の人は地上でお日様の光を浴びて生きているけれど、自分は地下に生き埋めにされていて、重くて苦しくて暑くてたまらない」と語られたのが印象的でした。引きこもっているときは、本当に体が重くて「まるでガソリンが空っぽの車を無理やり動かすような感じ」とも言っていました。温かい、受け入れられる言葉がけ等で、ガソリンは一滴ずつ溜まるけれど、冷たい言葉を浴びせかけられるだけで、すぐに０に戻ってしまうと言っていたのも印象に残りました。（高等学院　井口真）

選抜10人が熱弁 留学生の感性光る

２月17日、にほんご学院では恒例のスピーチコンテストを行いました。ベトナム、スリランカ、ネパール、ミャンマー、モンゴル、台湾、中国など９ヵ国１５０人の学生から選抜された10人によるスピーチは、留学生ならではの視点や感性や力強さが光り、どれも心を動かされるものばかりでした。今年度最優秀賞は、ベトナム出身のキュウ ティ ラン オアンさんの「自分のために生きましょう」。以下紹介します。

なお開催にあたり、ワイズメンズクラブから協賛をいただいたほか、会員の方やボランティアの方々にも多数ご来場くださいました。感謝してご報告します。（にほんご学院　柳原みずき）

入賞した学生と審査員たち。
最優秀賞のキュウ ティ ラン オアンさんは前列右から３人目。

自分のために生きましょう　――（抄訳）

キュウ ティ ラン オアン

私には幼い時から、大きなホテルで経営管理の仕事がしたいという夢がありました。しかし、私が生まれたところでは、女の子なら教師になるのが理想だと考えています。大学を選ぶ時、両親は私に師範大学でなければ行かせないと言ったので喧嘩になりましたが、説得して、自分が本当に行きたい大学に行けることになりました。大学に入ってからは、どんなにつらくても一生懸命勉強して、大学の優秀学生になることができました。両親は怒るどころか誇らしいと言ってくれました。（中略）今、私は日本にいます。自分がしたいことのために頑張っているからこそ、今も笑顔でいられます。

今の時代、国の経済が発展すればするほど、職業に関する競争が厳しくて「ただ安定した仕事があるだけでいい」「両親が決めた道に従うのが簡単でいい」という意見が増えても不思議ではありません。しかし、失敗する恐れがあったとしても、自分が好きな事をする幸せは大切だと思いませんか。確かに周りの意見を無視することはできません。しかし、人生は一度きりですから、後悔しないように、好きな事をして、自分なりの生活を送るべきです。

新刊紹介　『未完の独立宣言』

2・8朝鮮独立宣言から100年　（在日本韓国ＹＭＣＡ編）

新教出版社

定価2500円（税別）
四六判　全275ページ

日露戦争後の１９０６年、当時の東京で急増した中国人、朝鮮人留学生のためのＹＭＣＡが、東京ＹＭＣＡの一室を借りて設立されました。朝鮮人留学生のＹＭＣＡは、その後歴史の荒波をくぐり抜け、現在も在日本韓国ＹＭＣＡとして、東京と大阪の２ヶ所に拠点を置き活動を続けています。

指導者養成や文化運動等の実績を残してきた在日本韓国ＹＭＣＡの一世紀を超える歩みの中で、最も有名な史実は、１９１９年２月８日、当時の会館に数百名の留学生たちが集まる中で独立宣言が宣布されたことです。この独立宣言（２・８独立宣言）は、その後、同年３月１日にソウルや平壌で始まった、植民地統治下最大の独立運動である３・１運動の「導火線」の役割を果たしたことで知られており、韓国の中学、高校の歴史教科書でも必ず紹介されています。

在日本韓国ＹＭＣＡでは、この独立宣言の意義を広く伝えるために、毎年の記念式典の開催や記念資料室の運営を続けてきましたが、２０１９年の１００周年を機に、東京と大阪で記念国際シンポジウムを開催しました。このときの内容と、同じく１００周年記念として開催された全８回の連続セミナーの報告をまとめた書籍、『未完の独立宣言２・８朝鮮独立宣言から１００年』（在日本韓国ＹＭＣＡ編、新教出版社）がこのたび刊行されました。

韓国史だけでなく中国や台湾の民族運動史にも影響を与えた２・８独立宣言の国際性を明らかにした論考にはじまり、女性史、キリスト教史、文学研究等、幅広い視点からの検討、また２・８宣言が今日の私たちに何を語りかけるのかという現代的なテーマによる考察まで、実に多彩で多様な内容を一冊に込めました。

日韓が良好な関係を築くための鍵となっている近代の関係史を学ぶ上でも、大いに役立てていただけるものと思います。東京ＹＭＣＡの会員の皆様にぜひ手に取っていただけますと幸いです。

（在日本韓国ＹＭＣＡ主事　田附 和久）